

「神社の造営と祭祀」 「昭憲皇太后崩御百年」

企画・編集委員 阪本是丸

今年平成二十五年の五月、島根県の出雲大社では六十年振りの「大遷宮」が、また十月には伊勢の神宮で「第六十二回神宮式年遷宮」が、それぞれ斎行された。本年は、この出雲大社と神宮の「御遷宮」に当たる年ということもあって、国民の間でも近年の「パワー・スポット」的興味だけではなく、神社や神道についての本格的な関心がより一層昂まった年となった。このことは、各種メディアの出版・報道を見ても明らかである。

壮大な出雲大社の大社造、そして簡素な神宮の唯一神明造。この二系統の神社建築の様式が日本最古の社殿建築であることはよく知られているが、では一体何故にこのような社殿を造営し、そこに神を祀るようになったのか。これまでに、神道や神社の起源・成立に関する研究・調査は数多あるが、まだまだ不明な点があるというのが現状であり、とりわけ神社の造営と神社祭祀との関係に関する本格的かつ総合的研究はさほど多くないのが実情である。本号が、「神社の造営と祭祀―伊勢と出雲を中心に―」と銘打った特集を編んだのも、かかる観点からのごことであり、その企図が遺憾なく発揮された重厚で精緻な論考をお寄せいただいた執筆者各位に篤く御礼申し上げます。

また、本号では「昭憲皇太后崩御百年―皇太后と女子教育・社会福祉・洋装文化―」と題する第二の特集を組んだ。昨年は明治天皇が崩御されてから百年という式年の年であったが、明年は昭憲皇太后の崩御から百年という、これまた節目の年を迎える。この十数年来、昭憲皇太后に関連する研究は一段と進展し、様々な見解も出されているが、本号「巻頭言」で鎌田純一氏も指摘しているように、明治の精神・文化の根底には、明治天皇の大御心と昭憲皇太后の「坤徳」があったことは明らかである。本号には、その昭憲皇太后の「坤徳」の御事蹟を示す女子教育、社会福祉など様々な分野における御活動について、第一線の研究者が考察を加えた力作が数多く掲載されている。

この他にも、本号では特集だけでなく、紀要が年一回刊行となった第四十三号からの編集方針を堅持して、各種の論文や研究ノート、公開シンポジウムの記録、資料紹介、随想など、盛沢山の内容を掲載することが出来た。これも執筆者を始め、関係各位のご協力の賜物と衷心より感謝申し上げます次第である。

例えば、昭和六十三年に本学会が加藤玄智博士記念学会から明治聖徳記念学会と改称され、本紀要が『明治聖徳記念学会紀要 復刊』として第一号が刊行されてから今年で二十五年、本号で通巻五十号となった。まさしく「御遷宮」の年に相応しいご神慮であり、また故加藤玄智博士を始め一世紀に亘る幾多の先人たちのお導きであると思慮する。これを契機に、改めて本学会の更なる発展と社会への寄与を期すべく、今後とも関係者一同一丸となって所期の目的達成のため邁進する所存である。

(國學院大學神道文化学部教授)